

たのしい観光地 第17回 中丸謙一郎 (コラムニスト)

ダークツーリズムの粹と野暮

「ダークツーリズム」は戦争跡地や被害被災跡地など、歴史が持つ暗さや悲しみを対象とした観光だ。その場所で起きた出来事を、どのように訪問者に訴え、未来に残していくのだろうか。

1991年(平成3)、長崎

県島原の雲仙普賢岳で大規模な火砕流が発生し、報道陣を含む52名の被害者(うち43名が死亡)が出た。この事故は、ワイドショーや写真週刊誌などのショッキングな映像や写真が印象に残る、メディアによるジャーナリズムが元気があった頃の出来事として記憶されている。



1 島原市にある土石流被災家屋保存公園。災害の教訓を活かすことが試される企画である。2 市内の各施設には、災害の生々しさを伝える絵が用意される。



長崎市内での取材のついでに島原へ行った。ついでとはいっても諫早からは長崎方面とは逆方向にあたり、興味本位で訪れるにはかなりの時間が取られる。海岸沿いを走り、島原市内にある雲仙岳災害記念館に着いた。彼方には、1992年の大規模噴火で生まれた「平成新山」が、為す術もなかったちっぽけな人間たちを見下ろすかのよう

にそびえ立つ。この記念館は、雲仙普賢岳で起こった災害の歴史を知ることができ、多くの人に利用されている。「ダークツーリズム」ということばが言われ始めて、しばらく経つ。戦争や災害など、人間にとっての「負」の部分に関する痕跡を観光資源として、その展示や宣伝などで、災害そのものの事実や意味を記録し伝承していくことを考えている。

近年、このダークツーリズムの集客力は増大している。追手門学院大学井出明准教授の論文「記憶の承継とダークツーリズム」によると、ポーランドにある有名な「アウシュビッツ強制収容所」では、ここ10年で来場者が約3.5倍になり、また日本国内でも、現在、世界遺産登録を目指しているハンセン病

療養所「長島愛生園」(岡山県瀬戸内市)への来場者が1方2000人を超え、ここ3、4年で顕著な増加傾向が見られるという。わたし自身の記憶を辿っても、この「ダークツーリズム」に憧れた時期があった。90年代の前半に、まだ渡航の自由が保障されていないドイモイ政策前のベトナムや、内戦の気配の残るカンボジアを旅して回ったのは(映画で見た)ベトナム戦争の痕跡をこの目で確かめたかったわけだし、また、カンボジア内戦の負の遺跡「キリング・フィールド」の地に自らの足で立って見たかったからである。



雲仙岳災害記念館
島原市内にある雲仙岳災害記念館。遠くには噴火で生まれた平成新山が見える。住所●長崎県島原市平成町1-1 開館時間●9時~18時、年中無休

好奇心、使命感、正義を想うセンチメンタリズム。そんなものがないまぜとなった、まさに「ダークツーリズム」だ。雲仙岳災害記念館のそばには、「土石流被災家屋保存公園」がある。そこには、火砕流や土石流に飲み込まれた実際の家が、保存用メントに囲まれ、そのままの姿で保存されている。家の大半は土砂に埋まっているが、ところどころに生活空間が覗き、一瞬にして破壊された当時の生活の様子が生々しく迫ってくる。

雲仙岳災害記念館は、災害を機にこの土地の自然や歴史を学び、改めて自然に対する畏怖の念を取り戻そうという「学習」重視の展示だ。だが、この公園に保存されているのはあくまでもダイレクトな現場の絵だ。静寂、光、空気、匂い、ひしゃげた柱、土埃だらけの瓦屋根。圧倒的な情報量で、ふらりと訪れた旅人に「歴史」を訴えかけていく。

中丸謙一郎 (なままるけんいちろう)

コラムニスト。1963年生。横浜市出身。『POPEYE』『BRUTUS』『SOTOKOTO』誌でエディターを務めた後、独立。フリー編集者として、雑誌の創刊や書籍の編集に関わる。現在は、新聞、雑誌等に、昭和の風俗や日本の観光に関するコラムを寄稿している。主な著書に『ロックンロール・タイエット』(中央公論新社、扶桑社文庫)、『車輪の上』(樞出版社)、『大物講座』(講談社)など。現在、旅の合間に肉体改造中。日本民俗学会会員。

ダークツーリズムとは、悪趣味の極みともいえる。人々の死に絶えた場所、歴史における負の行為の刻まれた大地、人間の悲しみが澱のように漂う空間。そんなところを「たのしい観光地」として解放していくのは不謹慎だとの考え方もある。アメリカの「グラウンド・ゼロ」から東北震災の爪痕に至るまで、いくら観光が未来の重要産業であっても、観光資源の提供者側も旅人も、「それはなんのため?」という目的をもう一度見つめ直すことも必要だ。現場を可能な限り残す「啓蒙の手厚さ」か、あるいは看板一枚で済ます「潔さ」か。ダークツーリズムのさじ加減は、まるで「粹」や「野暮」のように、その国の文化として問われるのだ。